

第1201号事件申立人からの手紙（抜粋）

葬儀など終わらせ、このまま黙っておこうか、それとも今後、この様なことのない様にして欲しいことを主治医に伝えた方がいいのか、一人でずっと考えた。

四十九日を終わらせ、3月上旬に、入院が必要なら言って欲しいこと、正確に情報を出して欲しいこと、処置ひとつなく放置しないで欲しいことなど書き、主治医に手紙を出した。今後母のような人が出ないことを願いながら。

5月の連休明け、主治医から手紙が届き内容を見て愕然とした。

主治医の考え方に相当問題があるのではないかとこの様な考え方だったら、私の思いが全く伝わっていないし、今後もまた、母のような患者さんが出るだろうと思ったので、「患者の権利オンブズマン」に相談した。

丁寧に話を聞いて下さり、問題解決に向けて同行支援までしてくださったが、「診察に問題がない」の一点張りで解決に至らなかった。

そこで苦情調査を申し立てた。疑問点など徹底的に取り上げ、調査してくださったオンブズマンの方々には、本当に感謝している。

病院側も主治医も調査報告書をよく読み、現実から逃避することなく、しっかり受け止めて欲しい。これで終わりではなく今後、矛盾点を説明して欲しい。そうすることが今後のためになるし、今後、母と同じような人をなくすことにつながると思う。

今、毎日思っている。あの日もう一か所、別の病院に連れて行けば良かったと。そして、あの医師ではなく別の病院の医師に診てもらっていれば、生きていたかも知れないと。

母が亡くなった時、母にとってただ一人の孫は、2歳5か月になる時だった。母の事は全く覚えてないと思う。この1年半の間に言葉も増え、理解力も進歩し、身体も大きくなった。

また、今年5月には、母の望んでいた女の子が生まれた。母にとって二人目の孫だった。母も孫の成長を見たかったと思う。

人は、それぞれ様々な環境の中で生きている。病気にだけ目を向けるのではなく、その人の生き方、考え方に目を向けて欲しいと思う。

最後になりますが、患者の権利オンブズマンがあつて良かったと思っている。支えて下さり本当にありがとうございました。

平成25年6月10日